

卒業論文 2020 年度 (令和 02 年)

カーネル関数を用いた汎用的な活性化関数の開発

慶應義塾大学大学院 環境情報学部
神保和行

カーネル関数を用いた汎用的な活性化関数の開発

近年ディープラーニングでは、シグモイド関数や ReLU 関数などの活性化関数が一般的に用いられてきた。それらの活性化関数は、特定の条件下では高い精度を得ることができるが、あらゆる状況において最適化どうかはあまり議論されていない。一方、統計学の分野では、リンク関数が未知の場合には、カーネル関数を用いてノンパラメトリックに推定するという手法が推定されている。そこで本論文は事前に関数の形を指定しないディープラーニング活性化関数を提案する。さらに、実際のデータセットを用いて、従来の活性化関数と同等かそれ以上の精度で予測できることを提これが可能であることを示した。

キーワード:

1. ディープラーニング, 2. 活性化関数, 3. ノンパラメトリック, 4. カーネル関数

慶應義塾大学大学院 環境情報学部
神保和行

In recent years, activation functions such as sigmoidal and ReLU functions have been commonly used in deep learning. Those activation functions can achieve high accuracy under certain conditions, but whether or not they are optimal in all situations is less discussed. On the other hand, in the field of statistics, when the link function is unknown, a non-parametric estimation method using kernel functions has been estimated. Therefore, this paper proposes a deep learning activation function that does not specify the form of the function in advance. Furthermore, we show that it is possible to predict a deep learning activation function on an actual dataset with the same or better accuracy than conventional activation functions.

Keywords :

1. Deep lerning, 2. Activation Function, 3. Non parametric, 4. Kernel Function

Keio University Faculty of Environment and Information Studies

Kazuyuki Jimbo

目次

第1章 序論	1
1.1 はじめに	1
1.2 本論文の構成	1
第2章 背景	2
第3章 本研究における問題定義	3
第4章 提案手法	4
4.1 概要	4
第5章 実装	5
5.1 概要	5
第6章 評価	6
6.1 評価内容	6
第7章 結論	7
7.1 本研究のまとめ	7
7.2 本研究の課題	7
謝辞	8

目 次

表 目 次

第1章 序論

本章ではまず、本研究を取り巻く社会の背景について述べる。そして本研究の解決する課題及び課題を解決する意義、解決するための手法を提示する。最後に本論文の構成を外観し、序論を締める。

1.1 はじめに

慶應義塾大学 SFC では、卒業要件として卒業論文の執筆が必要とされている。近年、多くの学生が提出間近になってから卒論を執筆することが多くなっている。そうした学生の多くは、残留を繰り返し、魔剤を飲みながらデスレースを実施することとなる。

その中でも、 \LaTeX の理解は執筆において不可欠であり避けられない。しかしながら、多くの学生は WIP/TERM で予稿の執筆を怠り、いざ執筆を始めようとしても \LaTeX を用いて論文を執筆することが難しい。

そこで、本研究では RG の学生に向けて心優しい博士課程として、RG の卒業論文のスタイルに合った形であると言われているテンプレートを整理し、提供する。本テンプレートでは、基本的な章立ての中で、 \LaTeX の使い方を概説し、このクソみたいな文章を削除し、卒業論文を執筆するにあたって基本的な記法を理解できることを期待する。

なお、Bitcoin [1] は関係ない。

1.2 本論文の構成

本論文における以降の構成は次の通りである。

2 章では、背景を述べる。3 章では、本研究における問題の定義と、解決するための要件の整理を行う。4 章では、本研究の提案手法を述べる。5 章では、4 章で述べたシステムの実装について述べる。6 章では、3 章で求められた課題に対しての評価を行い、考察する。7

第2章 背景

本章では本研究の背景について述べる。

第3章 本研究における問題定義

第4章 提案手法

本章では提案手法について述べる.

4.1 概要

第5章 実装

本章では提案手法の実装について述べる.

5.1 概要

第6章 評価

本章では，提案システムの評価について述べる．

6.1 評価内容

第7章 結論

本章では，本研究のまとめと今後の課題を示す．

7.1 本研究のまとめ

7.2 本研究の課題

謝辞

本論文の執筆にあたり、ご指導頂いた慶應義塾大学環境情報学部村井純博士，同学部教授中村修博士，同学部教授楠本博之博士，同学部准教授高汐一紀博士，同学部教授三次仁博士，同学部准教授植原啓介博士，同学部准教授中澤仁博士，同学部準教授 Rodney D. Van Meter III 博士，同学部教授武田圭史博士，同大学政策・メディア研究科特任准教授鈴木茂哉博士，同大学政策・メディア研究科特任准教授佐藤 雅明博士，同大学 SFC 研究所上席所員齊藤賢爾博士に感謝致します。特に齊藤氏には重ねて感謝致します。研究活動を通して技術的視点，社会的視点等の様々な視点から私の研究に対して助言を頂き，深い思考と学びを経験させて頂くことができました。これらの経験は私の人生において人・学ぶ者として、素敵な財産として残りました。博士の指導なしには、卒業論文を執筆することは出来ませんでした。徳田・村井・楠本・中村・高汐・バンミーター・植原・三次・中澤・武田合同研究プロジェクトに所属している学部生，大学院生，卒業生の皆様に感謝致します。研究会に所属する多くの方々が各々の分野・研究で奮闘している姿を見て学んだことが私の研究生活をより充実したものとさせました。異なる分野同士が触れ合い，学び合う環境に出会えたことを嬉しく感じます。また，NECO 研究グループとして多くの意見・発想・知見を与えてくださった，慶應義塾大学政策メディア・研究科 阿部涼介氏，卒業生 菅藤佑太氏，在校生 島津翔太氏，宮本眺氏，松本三月氏，梶原留衣氏，渡辺聡紀氏，木内啓介氏，後藤悠太氏，倉重健氏，九鬼嘉隆氏，内田溪太氏，山本哲平氏，吉開拓人氏，金城奈葉海氏，長田琉羽里氏，前田大輔氏に感謝致します。皆様には，私の研究に対する多くの助言や発想を頂いただけでなく，研究活動における学びを経験させて頂きました。多くの出会いと学びの環境である SFC に感謝致します。多様な学問領域に触れ，学生同士で議論し思考することが出来ました。幸せで素敵な時間でした。研究活動における実験協力をしていただいた皆様に感謝いたします。特に，製作資料を提供して頂いた高島秀二郎氏，岡村奈於氏，栗原美優氏には，資料提供以外でも研究に関して多くの助言を頂き，研究をより良いものとすることができました。最後に，これまで私を育て，見守り，学びの機会を与えて頂いた，父 宏志氏，母 治子氏，姉 遥香氏，姉 裕香氏に感謝致します。

参考文献

- [1] Satoshi Nakamoto. Bitcoin: A peer-to-peer electronic cash system. <http://www.cryptovest.co.uk/resources/Bitcoin%20paper%20original.pdf>, 2008.